北海道釧路湖陵高等学校

SSH newsletter

発行日：2019.10.24
発行者：SSH 推進部
No. 2

□□ SSH特別講演会開催 □□

１　日　　時　令和元年１０月２５日（金）　１３：２０～１５：１０（５，６校時）

２　会　　場　北海道釧路湖陵高等学校　第１体育館

３　講演題目　「はやぶさ・はやぶさ２と宇宙創成の神秘、そして未来の科学による世界平和」

４　講　　師　ブラウン大学（アメリカ）惑星地質・上級研究員　　廣　井　孝　弘　氏

経歴：昭和３５（１９６０）年、岐阜県各務原市生まれ。昭和６３年、東京大学大学院理学系研究科鉱物学専攻博士課程修了。理学博士。平成３年、米国ブラウン大学研究員。平成６年、NASA ジョンソン宇宙センター研究員。平成９年、ブラウン大学惑星地質内の NASA-Keck 反射率実験室（RELAB）の上級研究解析士及び、同大学惑星地質の上級研究員。日本の固体惑星分光をする若い研究者達の指導的立場で活躍中。

【廣井先生のコラム（抜粋）】

日本にはだいぶん前からスーパーサイエンスハイスクール（ＳＳＨ）という制度があり、指定校は通常の理数系のカリキュラムを超えた大学レベルの学習や研究と発表の活動ができる。（中略）このＳＳＨという名前であるが、直訳すれば「超科学高校」となり、科学を超えたものを教える高校という響きがあるのが面白い。もちろん文科省の意図としては「スーパー」は「ハイスクール」に着くのかもしれないが、やはり英語の普通の意味だと、「スーパー」は「サイエンス」にかかるのではと感じてしまう。

私が高校に訪問する時に話すのは普通、はやぶさ・はやぶさ２ミッションの紹介と、それによって惑星科学が如何に躍進していくかであるが、近年においては、科学を超えたものの話もする。当然のことだが、科学の目的は科学自体ではなく、この世のすべての現象の背後の原因を探ることである。真理の追求といってもよい。しかしながら、科学が自然哲学と呼ばれたギリシャ時代と違い、現代の科学は目に見える物質世界を取り仕切る法則を見出すことのみで満足しているように見える。根本原因や目的を探る哲学とは言えない。

実際、霊魂とか霊界、そしてビッグバンの原因、さらには人間原理やＩＤ理論で指摘しているように、地球がなぜ人間の科学活動に最適にできているか？などの本質的問題を切り捨て、議論を避けているから、精密な答えを出し続けているだけである。理学博士号をとるとPh.Dという「哲学博士」の称号を受けるが、自然哲学をやめた理学博士には本当はその資格はない。私は名実ともにそれを回復したいと思っている。科学が未知のものを探求し続けない限り、その使命は果たせない。

科学がそういうテーマに取り組んで「超科学」になることの恩恵は実はとてつもなく大きい。なぜなら、この世を超えた世界は、主に宗教が各々勝手な主張をしながらお互いに争っている場になっていることが多いからである。それら宗教が扱っているテーマは、この「宇宙の根源」とか「死後の世界」であり、それはビッグバンの前にあり、人間が死んだら行く霊界のようなものの内容を天の啓示として信じなさいと言っている教えであるともいえる。しかしながら、文化背景も経験も違う人々が異なることを信じるのは自然であり、グローバルな社会になるほどそれらの衝突が起こってくる。

科学は結果には原因があるという論理を突き詰めてきた学問であり、観測や実験を通してだれが何度やっても同じ結果が出て同じ結論に至るという客観性に立脚してきた。そのような科学の手法を、宗教が勝手に語ってきた霊界に適用することで、世界人類が合意できる、信じなくとも知識として知ることのできる世界にすれば、宗教は１つになる、というより宗教は必要なくなり、科学と宗教が１つの新しい真理体系として完成するのではないか？　そういう世界に向かう一歩として、惑星科学の立場から私は生徒らに未来を託すつもりで教え続けたい。